



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099 (226) 5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円



奄美信徒の温かさに包まれた式典で

アウグスチノ鈴木康由さん司祭に叙階

二月二十四日(日)、久しぶりの司祭叙階式で奄美市の聖心教会が喜びに包まれた。この日、司祭叙階の恵みを受けたのはアウグスチノ鈴木康由教区助祭。司祭職を志してから十五年かけての叙階式は、本人だけでなく、見守った関係者の大きな喜びともなった。

教区で司祭叙階式が執行されたのはG・ティエン神父(現小宿主任司祭)以来、実に七年ぶり。また奄美大島の叙階式となるのは浜崎真実神父(出向中)と平孝之神父(コンベンツアル会)以来、実に十八年ぶりともなり、久しぶりの大島での叙階式ともあって聖心教会には四百人ほどの信徒が駆けつけ、その熱気に聖堂内は満たされていた。



郡山司教から授けを受ける

午後四時から始められた郡山司教主司式の司祭叙階式ミサは、二十五人の司祭団に助祭七人も加わるという荘厳なものだった。福音朗読後に説教した郡山司教は、受階まで十五年を要した鈴木さんの歩みにふれ、その上で彼が叙階記念のカードに刻んだコヘレトの言葉を語り上げ、「神の永遠を思う気持ちには計り知れない。鈴木さんが体験

した待つという期間が今終わり、司祭として生きる時が成就した」と鈴木さんの忍んできた月日をねぎらった。その後は司祭の役割についての訓話を受け、信者たちの歌う熱い連願に包まれた後、司祭の聖別の祈り

と授けによって鈴木さんは司祭の聖位に上げられた。ミサ後は奄美観光ホテルで祝賀会が開かれた。奄美は新司祭が助祭の間に司牧実習した所ということもあって、三百人ほどの信者たちが参列した。祝宴に入るもつた出し物が次々に披露されたほか、司祭団も舞台上でユーモラスな踊りを見せるなど、この地ならではの温かいもてなしで、会場は喜びいっぱいとなった。

司祭の生き方と信仰を学ぶ

今年の司祭大会で岩島忠彦神父から

恒例の司祭大会は今年薩摩川内市樋脇町のホテル「グリーンヒル」で一月二十八日(月)から三十一日(木)まで行われ、司祭、助祭、終身助祭ら四十一人が出席した。今年の

講師には岩島忠彦神父(イエズス会)を招き、信仰年に際し「司祭の生き方と信仰について」学習した。講話は二十八日と二十九日にあり、岩島神父は神父が三十年あまり続けている未信者を対象にした「キリスト教信仰入門講座」について

司祭叙階式のお知らせ

〔叙階式〕
日時 3月20日(水) 14時30分
場所 鹿兒島カテドラル・ザビエル記念聖堂
司式 郡山健次郎司教
受階者 チョン・ポプ・ジョン・アントニオ助祭
ソン・ジン・ウク・ドミニコ助祭

〔祝賀会〕
ミサ後、ザビエル教会一階ホール
※司祭団と韓国からの参列者は別会場

教区人事

▼ベルナルディーノ神父(志布志教会主任司祭)は、現職のまま小隈神父の不在の間、鹿屋教会管理

▼鈴木康由神父(新司祭)は、九月からローマ・ウルバノ大学へ留学。出国までの間は吉野教会に居住

司祭の消息

▼田原章神父(聖マリア学園理事長)は、三月十七日(日)で司祭叙階六十年(ダイヤモンド祝)を迎える。

▼小隈憲士神父(鹿屋教会主任司祭)は、三月二十一日(木)で司祭叙階二

など、実践に基づく司祭の本質論を教えてくれた。また岩島神父は講話の冒頭「あなたたちは、本当に主を信じていますか」と司祭たちに刺激的な質問をし、「あなたの方の信仰を見、感じ多くの人が信仰に入ってきている。だからあなたたちが持っている本物の信仰を伝えなさい」とメッセージを送った。

十五周年(銀祝)を迎え、四月一日から九月三十日までサバティカル(研修休暇)に入る。▼中野裕明神父(神学生養成担当)は四月一日付で、日本カトリック神学院副院長

ドミニコ田原章神父 司祭叙階60周年感謝ミサ

日時: 3月10日(日) 16時
場所: ザビエル教会
※ミサ後にザビエル教会1Fホールで祝賀会

文芸
短歌

鹿児島純心 川上 和
幾年かキリシタン灯籠古寺庭のつわぶき
あかす右近の信仰
鴨池教会 前田 儀子
内省を心の軸としこれからは縁となりし
深き歌詠まむ
野牡丹の深紫のひと枝を妹に手向くコッ
プに挿して
奄美市 林 常広
トンビ飛び大空高く舞回り奄美天空我目
をいやす
大笠利 稲 牛憲
灯の消える前の光に似て居んか口ザリオ

俳句
を祈る楽しさを知る

出水市 沖 弘子
藪椿ひそと咲きをり四旬節
鹿児島純心 川上 和
水瓶のぶどう酒美しカナの宴
鹿児島市 徳永ノブ子
着ぶくれてミサえと急ぐ奥吉野
良き事を待ちいる思ひ二月かな
手を胸に祈る心や春を待つ
霧島市 政 ノブ子
大寒や心ひとつにアヴェマリア
純心学園 山頭 信子
ミサ終えてうる目いわしの昼餉かな
絵はがきのヤマオダマキや春待ちし

司祭叙階の恵みを受けて

新司祭 アウグスチノ 鈴木康由



去る二月二十四日（日）、郡山司教様の司式により奄美大島の聖心教会で司祭叙階の恵みを頂きました。司教様をはじめ、私を受け入れてくださった司祭団の皆様、そしてお祈りくださった信徒の皆様にお礼を申し上げます。司祭職に向けた私の覚束ない歩みが皆様によって今まで支えられてきたことを実感しております。

さて、私は叙階に至るまで十五年の歳月を費やしました。これは通常、神学生が叙階するまでの二・五倍の期間に相当します。この長い月日の中でいつも不思議に思っていたことがあり

して「今は司祭として生きる準備をしている」という答えが心のうちに生じました。そのとき、私の目的は「司祭になる」ことではなく、「司祭として生きる」ことである、とはつきりと理解できたのです。これが私にとっての真の召命体験と言えるでしょう。このときから私の苦しみと悲しみの日々は、司祭として生きるための今、何をすればいいのか、ということを考える毎日にならざるを得ない。そして、その希望はそれから先を生きる喜びとなり、今までの出来事すべてに対する感謝ともなったのである。司教様の紋章には「それでも、喜び、希望、感謝」とあります。神様とイエス様を信じる歩みとはまさにこの言葉に集約されるのではないのでしょうか。これからは「それでも」という言葉を神様からの大きな恵みの中で皆様と分かち合っていきたいと思っております。

黙想会「イエズスに近づいて」
日程：4月13（土）～14日（日）／8月3（土）～4日（日）／12月14（土）～15日（日）
指導：W・キップス神父（レデンプトル会・パストラル教育研究センター）
場所：マリア山荘
参加費：10,000円（宿泊費・食費込み）
申込：福沢智子 Tel・Fax0993（78）4975
メール：fuku-h@ml.satsuma.ne.jp

ホリスティック四旬節一日黙想会
「病気と信仰の受け止め方」
—聖ヒルデガルド修道女医師から学ぶ—
指導：坂本進神父（溝辺教会主任司祭）
日時：3月18日（月）10時～15時30分
場所：ザビエル教会1Fホール
受講料：1000円+弁当代（500円※要予約）
申込：古城 ☎090-3193-0148

カトリック通信講座のご案内

一どなたでも、いつからでも、どの講座でも、ご自分のペースでご受講いただけます—

神・発見の手引
私たちに常に呼びかけている神について、人生、自然などの具体例や哲学者の言葉を通して考えます。
全15講 受講料4,500円

生きること・死ぬこと
現代社会の状況のなかで、「いのち」について考えます。健康と病気、産むこと、老いることなど。
全10講 受講料5,000円

＜お申込み方法＞
郵便局に備え付けの振替用紙にご希望の講座名をご記入の上、受講料を下記にお振込みください。
入金確認後教材をお送り致します。
振替口座番号：00170-2-84745
加入者名：オリエンズ宗教研究所

＜お問い合わせ・お申し込み＞
オリエンズ宗教研究所「カトリック通信講座」
〒156-0043 東京都世田谷区松原2-28-5
Tel：03-3322-7601
Fax：03-3325-5322
URL：http://www.oriens.or.jp
携帯サイト：http://www.oriens.or.jp/mobile/
※ご希望の方にはパンフレットをお送りいたします。

の死を「よし」とされ、復活による永遠の命を与えられたのです。言い換えれば、復活とは地上でのイエス様がなさったみ業が「完全に」成し遂げられたことを意味するのです（ヨハネ19・28～30）。

ところで、復活したイエス様の手やわき腹には十字架に釘付けられたときの傷がありました。たとえ息まわしい傷であってもこの傷こそ、生前のイエス様と復活したイエス様が同じであることの証です。

ここには復活の命が生前の

復活を原語から考える

鈴木神父のやさしいみことば

者が蘇ったわけではない、ということが込められています。

復活は神様のみ業なので、すから、その復活とは、生前のイエス様のみ言葉と行



保存部材運び込みから十年

続・聖堂再建プロジェクトの終了式を四月七日に挙行

御受難会のご好意で、鹿兒島のザビエル旧聖堂の保存部材を福岡県宗像市の同修道会宗像修道院と「福岡黙想の家」が立っている敷地内に運び、十年が過ぎました。



この地での経過を簡単に申し上げますと、起工式を二〇〇七年四月十五日に行いました。その時には四年間で完成させる計画で「聖堂再生プロジェクト」を発足させ、四年目の二〇一一年四月十日に福岡教区長の宮原司教様に中期祝福式をして頂きました。その時、未完成をお詫びしながら、二年の予定で「続・聖堂再生プロジェクト」立ち上げ、工事を続けました。まだ、ご像、十字架、説教台等設

置されておりませんが、建造物としては工事を終え、この三月中旬に竣工検査を受ける運びになりました。六年間にわたる温かいご支援の賜物と感謝していただきます。ありがとうございます。

そこで聖ザビエルの誕生日にあたる四月七日(日)午後二時から、現地において「続・聖堂再生プロジェクト」の看板を降ろし、ご協力をいただいた多くの

方々に感謝を込めて、終了式を開催します。そして今後はNPO法人文化財保存工学研究室は「便所・管理棟」への建設に努力していきます。

今年の中高生の長崎巡礼

テーマは「みことば(信仰)を生きるとは」

毎年恒例の中高生の長崎巡礼を今年も四月一日(月)から二泊三日の予定で実施すると泉浩二神父(教区青少年担当司祭)は発表し、参加者を募集している。

今年のテーマは「みことば(信仰)を生きるとは」で、泉神父は殉教者たちが

信者と共に歩む司祭

司教執務室だより

三月は叙階式に復活祭と大きな出来事が続く。とくに、二か月連続での叙階式というのは、教区始まって以来の慶事に違いない。

司祭に叙階された当初、毎日のミサは、緊張の連続だった。しかし、ミサの式次第にも慣れてくると、ミサのいろいろな祈りにも心を止めるゆとりも生まれてきた。そして、一番驚いたのは、「これはあなた方のために渡される私のからだ」という聖変化の言葉だった。私のからだ、に驚いたのだ。せめて、「：渡されるキリストのからだ」なら気が楽なのだと思うものだ。「渡される私のからだ」となる

と信者に向かって「渡します！」と宣言していることになるのではないかと、と恐れれたからだ。その恐れから解放されたのは、「キリス



トのからだ」と言って差し出したご聖体を「アーメン」と言って受け取る信者たちの応答の言葉だった。「：渡されるキリストのからだ！」「ハイ、分かります。私もあなたのように生きます。アーメン」という宣言だと気がついたからだ。そうか、信者たちと一緒にできるかもしれない、と思えた時、信者たちが頼もしい同伴者に思えたのだ。そして、心が軽くなった。

それ以来、アーメンが、司祭として、また主の道をたどる一人の求道者として生きるための鍵となる言葉になった。そして、アーメンがマリア様の「なれかし」に始まり、十字架上での「委ねます」に至るまで一貫した聖家族の合言葉だったに違いないとの確信となり、やがて「それでも」に結実した。司祭職の道を歩み出す三人へのはなむけの言葉となつたらうれしい。

短信

吉野教会で堅信式

一月二十日(日)吉野教会(牧山田一神父)で堅信式があり、昨年クリスマスに受洗した二人が郡山司教から堅信の恵みを受けた。

スピリチュアル研修会

臨床パストラル教育研究センター九州ブロック主催のスピリチュアル研修会

で、今春中学生になる人も参加できる。参加費は一万五千円で、離島からの本土までの旅費は主催者が負担する。参加希望の人は泉浩二神父まで(☎099-9912-5718・099-9912-5718)。申込締め切りは三月二十四日(日)となっている。

が二月十六日(土)教区本部で開かれ十三人が受講、中島保壽牧師(日本キリスト教団)から「痛みのあるコントロール」について学んだ。

◆侍者を募集
教区召命担当では、三月二十日の叙階式で侍者してくれる子どもたちを募集している。希望者は教会ごとに泉浩二神父まで。申込締切は三月十七日。

会と催し (3月)

- 3日(日) 四旬節第三主日
 - 4日(月) 奄美信仰養成講座・聖心教会・9日まで
 - 10日(日) 四旬節第四主日
 - 11日(月) 田原章神父叙階六十周年感謝ミサ・ザビエル教会・16時
 - 14日(木) 柳本繁春神父叙階記念(一九六四年)
 - 16日(土) 宣教学校・教区本部・13時30分
 - 17日(日) 四旬節第五主日
 - 18日(月) 田原章神父叙階記念日(一九五三年)
 - 18日(月) レデンブートル会例会
 - 19日(火) 岡俊郎神父叙階記念(一九六六年)
 - 19日(火) 聖ヨセフ
 - 19日(火) 大野和夫神父、牧山田一神父、岡俊郎神父、柄尾泰英神父霊名
 - 20日(水) 丸野六雄神父叙階記念(一九七七年)
 - 20日(水) ゼローム神父命日(二〇〇三年)
 - 20日(水) 司祭叙階式(ソン・ジン・ウク・ドミニコ助祭、ジョン・ポップ・ジョン・アントニオ助祭)・ザビエル教会・14時30分
 - 21日(木) 郡山健次郎司教叙階記念日(一九七二年)
 - 21日(木) 永山幸弘神父(一九六八年)、寝占敦之神父叙階記念(一九八三年)
 - 21日(木) 美島春雄神父(一九六七年)、小隈憲士神父(一九八八年)、大松正弘神父(一九八七年)末吉卓也神父(二〇〇三年)、石田望神父叙階記念(二〇〇三年)
 - 24日(日) 受難の主日(枝の主日)
 - 24日(日) 世界青年の日
 - 25日(月) 山口好信神父叙階記念(一九九一年)
 - 25日(月) 泉浩二神父叙階記念日(一九九三年)
 - 27日(水) コンタリーニ神父(一九九八年)、島田喜藏神父命日(一九四八年)
 - 28日(木) 聖木曜日(主の晩さん)
 - 28日(木) 聖香油ミサ・ザビエル教会・10時
 - 29日(金) 田邊徹神父叙階記念(一九五一年)
 - 29日(金) 明松尊吉神父命日(一九九二年)
 - 29日(金) 聖金曜日(受難の主日) 大斎・小斎聖地のための献金
 - 30日(土) 聖土曜日
 - 31日(日) 復活の主日
 - 31日(日) 河野純徳神父命日(一九八九年)
- 祈りの意向
- 【ノベナ】洗礼志願者のため(23~31日)
- 【祈祷の使徒会】
- 一般・自然を大切にすること
- 教・聖職者
- 日本の教会・社会的孤立の解消

ザビエル書院の窓



高橋重幸著
憩いの水のほとりに
オリエンズ宗教研究所
定価・千五百円+税

わずか6節からなる詩編23。羊飼いである神とそれに養われる人間の深い絆と信頼を歌った詩。これを深く味わうための手引書。Tel.099-226-2430

1 二十六聖人の殉教と右近

慶長二年（一五九七年）、有名な日本二十六聖人の殉教事件が起こりました。理由は「豊臣秀吉がキリシタン国による日本侵略を恐れたから」と言われています。

西洋キリシタン国が宣教師をはじめに送り、次に貿易通商を開かせ、そして最後に軍隊を送って日本においてキリシタンになつた者たちに手引きをさせて、日本を植民地にさせることを危惧し、そのみせしめとして二十六人を処刑させたのです。ところが、その処刑者リストの最初に実は、高山右近の名前が記されていたことはあまり知られていません。右近はキリシタンの頭目とみなされていたのですから、当然のことだったのです。この時、秀吉から天正十五年（一五八七年）に大名の地位を剥奪され追放処分を受けていた右近は、右近を尊敬していた豊臣政権ナンバー2の実力者・前田利家の客将、茶の宗匠として二万七千石を扶持されていきました。

2 石田三成の執り成し

秀吉は、キリシタンの背後にあるキリシタン国の侵略を恐れ、在日宣教師及び邦人指導者達を処分しようとして、処刑者リストを作らせる任務を側近第一人者の石田三成に与えたのです。三成は、部下にそのリストを作らせ提出させました。もちろん、そのリストの最初に右近の名前が記されて

あつたことは言うまでもありません。すると三成は「右近は、天正十五年のバレン追放令の折り、殿下（秀吉）によって処罰を受けている。既に処罰を受けた者を改めて処罰することはできない道理である」と述べて、右近の名をリストから削除させたのです。

三成は、右近の名を削除したりリストを秀吉のもとに持っていくました。秀吉が「右近の名がないではないか。おかしいのお」と三成に問うと、三成は「右近は、既に殿下によって罰せられております。一度、罰した者を改めて罰することは筋が通りません」と答えました。むろん、この論法が詭弁であることは、三成も

キリシタンの歴史⑪

高山右近（下）

溝辺教会主任司祭

坂本 進

助けようという気持ちを起こさせたいことなわけです。現代においても同じではないでしょうか。同じ危機にあつても人格のある人は助けられ、人格のない人は処刑されていくと言えりませんか。しかし、そうして助けられたにもかかわらず、右近は処刑される人々のうわさを聞くと「名乗りを挙げ、自分も処刑されるべき」と前田利家に告げたのです。利家の必死の説得により、思いとどまりましたが、ここに死をも恐れぬ、神への絶対的信仰を貫き通そうとする右近の強い信仰心を見ることができるとは、

3 信仰者の二つの生き方のタイプ 右近と行長

遠藤周作『弱虫と強虫』

秀吉も知っていたのです。が、あえてそれ以上、秀吉は言及しなかつたそうです。三成は、無二の親友であつたアウグスチノ小西行長から、右近を助けるよう頼まれていたのです。ご承知の通り、行長は右近の導きでキリスト教信仰に目覚め、行長にとつて右近は信仰の師匠でありました。光成は、無二の親友である行長から頼まれていたことに加え、自身も右近に尊敬の気持ちを持っていました。そして、豊臣政権の実力者・前田利家が右近を救おうとしていたと思惑も理解していたので、詭弁を弄して、右近を救つたのです。即ち、右近の人格・人柄が多くのまわりにいた人々に右近を

「人間には、強虫と弱虫があります。ここでいう強虫とは、いかなる障害があつても、最後まで自分の信念とか生き方を貫く人物を指しますが、私は強虫ではないので、これまで弱虫のことばかり小説に書いてきました」

右近がどのように強虫であつたかは、彼の生涯にまつた信仰によつて明白です。

私が高山の大学に奉職していた時、遠藤周作氏が講演に招かれたことがありました。氏は「キリスト教の信仰とは、強い父のような神を信じるといふより、弱さを持ちながらも、そんな自分があるのまま受け容れてくれる母のような神を信じるのではないでしようか」と言われました。この氏の考え方は、『沈黙』の中で「踏み絵を踏んでもいいんだよ」と神がおしゃつておられると、転びパテレンに言わせた記述と軌を一にさせています。氏は「神様はお母さんの

+KABAYAN SEKSIYON+
Pagkuhang Muli sa mga Yaman ng Vaticano II

Dahil sa kakulangan ng pagkaunawa ng mga Kristiyanong Katoliko tungkol sa mga Dokumento at Turo ng Vaticano II, marami ang naliligaw ng landas ng pananampalataya. Higit na nakakalungkot, ang iba ay may kanya-kanyang sariling paniniwala hingil sa pagsamba at pagkilala sa Diyos. Kaya marami mga Kristiyanong Katoliko ang tumititawag sa simbahan at naghahanap sila ng ibang paraan para sambahin din ang Diyos, kaya lang ang hindi nila mahanap-hanap dahil sa kakulangan sa pag-unawa ng turo ng Inang Simbahan, hingil sa mga dokumento ng Vaticano II.

Kaya sa unang araw ng "Taon ng Pananampalatay" na ipinahayag ni Papa Benedicto XVI, ipinagdiriwang din ang ika-50 taon ng pagbubukas ng Ikalawang Konsilyo Vaticano (Oktubre 11, 1962-2012), ang pinakadakilang kaganapang panrelihiyon sa nagdaang siglo.

Sa loob ng "Taon ng Pananampalataya" tinatawagan ang mga Katoliko na pag-aralan at pagnilayan ang 16 na mga dokumento ng Vaticano II at magsiyasat sa Katesismo ng Simbahang Katoliko. Nakatuon ang gawaing ito tungo sa higit na malalim na pag-unawa at pananagutan na isabuhay ang ating pananampalataya.

Sa Porta Fidei 5 (Pinto ng Pananampalataya), ang apostolic letter ni Papa Benedicto XVI, inulit ng Santo Papa ang mga salita ni Juan Pablo II na nanindigan na ang mga nilalaman ng Vaticano II "ay hindi nababawasan ng halaga o brilyo. Higit kailanman nararamdaman kong tungkulin kong tukuyin ang Konsilyo bilang dakilang biyayang ipinagkaloo sa Simbahan sa ika-20 siglo: ditto makakatagpo tayo ng tiyak na paggabay na aalalay sa pagharap natin sa siglong nagsisimula ngayon." Ang Vaticano II "ay maaaring maging tunay na makapangyarihan tungo sa di matatakasang pagpapanibago ng Simbahan."

Sinasabing "pagpapanibago ng Simbahan", ang ibig sabihin kasama din tayong mga mananampalataya na binabago ng mga turo ng Vaticano II. Tulad ng pagbibigay halaga sa yaman ng Vaticano II, na kung saan itinuro sa simbahan ang kagandahan at kahalagahan ng liturhiya at mga babasahin. Na dito natin nararanasan ang kagandahang-loob ng Diyos na ipinakita sa atin diyan sa kanyang Bugtong na Anak na si Jesukristo.

Huwag natin balewalain ang mga yamang ito na magsisilbi sa atin gabay sa pagpapalalim ng ating pananampalataya at ang pagpapahalaga sa turo ng Panginoon na inihatid din sa atin sa pamamagitan ng kanyang mga alagad na ipinaabot din sa atin, bilang kasapi ng Simbahang Katoliko.

Katesismo sa "Taon ng Pananampalataya" (Fr. Dino Orolfo)



故西本神父（レデンプトール会）とマニラの高山右近像前で

「右近は、家康のキリシタン国外追放に直面して、あきらめず動じた。この時、右近には国内にとどまる方法はいくらでもあつたのですが、彼は決して、それを望みませんでした。どのような迫害を受けようとも、宗教上の信念に生きるためならばと、むしろ喜んで、家族と共に小船で、マニラへ追放されていったのです。が、その疲労がたたつて、マニラに渡つて間もなく病死しました。」

4 強虫・高山右近―信仰を一筋に貫く

遠藤氏は、同書の中で、こう結んでいます。「右近は、家康のキリシタン国外追放に直面して、あきらめず動じた。この時、右近には国内にとどまる方法はいくらでもあつたのですが、彼は決して、それを望みませんでした。どのような迫害を受けようとも、宗教上の信念に生きるためならばと、むしろ喜んで、家族と共に小船で、マニラへ追放されていったのです。が、その疲労がたたつて、マニラに渡つて間もなく病死しました。」

みなさん、たとえ弱虫である我々であっても、強虫になることも必要なのではないでしょうか。いや、強虫になることができるのです。キリスト教会は弱い立場にある人々を受け容れる教会であると共に、右近のような強虫で、敬虔、かつなにもにも揺るがされずブレず、信仰一筋に生きることでできる人を、育てていく教会でもあるべきなのではないでしょうか。

キリシタン大名は数少なくありませんが、文字通り身をもつて己が宗教に殉じた人物は、高山右近ただ一人でした。これまで、私は同じキリスト教信者として、右近には距離を感じ続けてきました。ぐうたら好きの私は、右近のような強虫には、とてもなれそうにないからです。だが、これほどまでに強靱な人物がいたというのに対しては、やはり畏敬の念をぬぐえません」

*次号には、『高山右近』補筆の章を記させていただきます。